

# 姿勢と頷きが会話量及び印象など諸感情に及ぼす影響について

## Influence that posture and nodding exert on various feelings including amount of conversation and impression.

吉 田 絵 美

### 要 旨

本研究では、姿勢（注意、拒否）と頷き（多量、少量）の2つの異なる非言語チャンネルを組み合わせて4条件を作成し、使用することによりどのようなメッセージが相手に伝達されるかを、会話量や印象などの従属変数を用いて調査した。その結果、会話量における非言語的不一致メッセージでは、拒否の姿勢と頻繁な頷きで構成された条件2よりも、注意の姿勢と少量の頷きで構成された条件3において平均会話量が増加した。被験者の内省報告から、姿勢のもつ意味に応じて頷きは意味を変化させることがわかった。姿勢と頷きの非言語的一致メッセージは概ね相手に好印象を与え、非言語的不一致メッセージはその意味の複雑な食い違いから相手により印象を与えないことが明らかになった。そして、姿勢と頷きによる意味不一致の組み合わせによって発生する否定的感情は、ほぼ同量であることが明らかになった。

また、非言語的一致メッセージは相手の否定的な感情を緩和する傾向があると思われる。

キーワード：非言語的コミュニケーション、姿勢、頷き、不一致メッセージ

## I. 序論

### 1. 情報の伝達

情報の伝達には常にその送り手と受け手が存在する。対人コミュニケーションは情報を相手に送る（符号化 encoding）ことと、その情報を受け取り読み取る（符号解読 decoding）ことの繰り返しによって成立する相互作用場面であり、情報伝達のための方法は言語的コミュニケーション（verbal communication）と非言語的コミュニケーション（nonverbal communication）の2つに大別される。言語的コミュニケーションは意識的なものであるのに対し、非言語的コミュニケーションは半ば無意識に使用されることもあり、情報の送り手の真意が受け手に伝わりやすいといわれている。その非言語的情報を表出するものを非言語チャンネルと言い、

大坊<sup>1)</sup>はその種類について、対人距離や傾き、姿勢などの身体の動き、微笑みなどの表情、単発的な瞳の動きを含む視線、身体的接触、語調や声の大きさなどの近言語、嗅覚作用、そして化粧などの人工物等を挙げている。

我々は手紙や電話などのとりわけ言語を主とするコミュニケーション場面において、常に慎重に言葉を選びながら相手と言葉のやり取りをしており、それをしないで言葉を発することはまれである。また、身振りや姿勢などの言葉によらない伝達手段を含むコミュニケーション場面においては、それらは送り手の統制を受けずに自然と使用される傾向にあり、受け手にその意味が伝達される。Mehrabian<sup>2)</sup>が、『感情の総計＝言葉による感情表現（7%）＋声による感情表現（38%）＋顔による感情表現（55%）』の等式が成立することを示したように、非言語的情報は言語的情報に比べ伝達されやすく、受け手にその送り手の感情を強く印象づける。非言語的コミュニケーションを訓練や心がけなどにより意識的に使用し、また正確に情報を受け取ることにより、言葉による誤解を無くし、より円滑な人間関係を築くことが可能である。

また、我々は対人相互作用場面において、相手の言動に注意を払い、そこで収集した情報内容に基づいて相手に対する印象を形成する。印象形成の過程では相手からの手がかりを元にその情報の有効性を吟味するが、印象形成における手がかりの特徴はそれぞれ異なっており、性別・身長・体重・体格などの身体的特徴のほかに非言語的の手がかりが大きく関係している。非言語的行動が自発的なものであり意図されたものではないと判断した場合、相手のとった非言語的行動はそのままその個人の気質や性質を正確に反映させたものとして受け止められる。

なお、非言語的情報への感受性や意味内容の捉え方には性差が存在することがMehrabian<sup>3)</sup>や工藤・西川<sup>4)</sup>などによって確認されており、さらに男性より女性のほうが若干ではあるがより優れていることが知られている。

## 2. 頷きについて

対人相互作用場面において特定の手がかりを示すことは、相手の行動に影響を及ぼす手段となる。Matarazzo<sup>5)</sup>は、雇用面接において面接者の頷きを要因とするABA計画を実施し被面接者の潜時を計測した。実験の結果、頷きの有無によって潜時が変化したことを受けて、頷きが相手の社会的承認欲求を満足させる強化因子であり、頷くことによって相手の発言をさらに引き出せることを示した。また、頷き以外の、微笑や相手の目を凝視するなどの手がかりにおいても同様の効果が得られると言われている。そして、相手に対する適度の関与を維持することによって相手の気分を楽にさせ、自分は認められているなどの社会的承認欲求を充足することができると考えられている。こうした広義の肯定反応は、対人関係の如何に拘わらずその人の作業成績を上昇させるものであると言われている。

また、鈴木ら<sup>6)</sup>は調査から、頷きは同意と受け止められるが、分かったふりなど同意とは異なる意味もあり、単純な行動ほど複雑な推測が行われていることを見いだしている。

### 3. 姿勢について

一般に姿勢は30秒から5～6分間続く身体の状態であるとされている。それは、その間に目立った動きはなく身体の静止した状態であることを示している。姿勢は顔や手足の動作などの他の非言語チャネルほど多くの情報発信や役割機能を持たないが、対人相互作用場面における相手との地位の提示手段として重要な役割を果たしている。

身体を縦の中心線で等分した場合に、頭や肩、腕、脚などが左右対称でないときにはくつろぎの姿勢が、左右対称であるときには緊張の姿勢がとられていると考えることができる。相手に対してくつろいだ姿勢をとることは地位の上下関係を表す明確な合図であり、相手の地位が自分より低いと思ったときにとられやすいことがわかっている。

地位を提示する姿勢は、身体の左右の対称具合だけでなく身体の前傾-後傾などによっても表現される。工藤・西川<sup>4)</sup>は、姿勢から自己充実性、対人的好意性、対人的意識性の3つの因子を見出した。自己充実性は、主に胴体の後傾によって表現され、手や足の閉鎖などは非充実感を示していた。対人好意性は、胴体の前傾によって表現された。そして対人的意識性については、肩の突出などの表現が見いだされた。このことは、Mehrabian<sup>3)</sup>が座位姿勢と方向と対人距離との関係を調査した際に発見した、好意の中立的な相手には最も直接的であり非常に嫌った相手には最も非直接的、そして非常に好きな相手には適度に直行的であるという、肩の方向性に関する結果を支持している。また、Mehrabianは激しい嫌悪が高度のくつろぎの姿勢によっても伝達されうることも発見した。

鈴木ら<sup>6)</sup>が、様々な非言語チャネルを想定したノンバーバル行動調査用紙を作成し評定者に回答を求めたところ、「身をのりだす」姿勢は興味・関心・積極性を示し、「はすに構える」姿勢は相手に対して親しく接近するものではなく、「他の人と異なる方向を向いて座る」姿勢は拒否・協調性欠如と評定者にそれぞれ受け止められた。また、評定者は「腕を組む」姿勢では防衛・拒否と感じていた。

このように、姿勢を構成する各身体部位にもさまざまな意味機能が存在しており、人は姿勢だけでなく顔の表情や声の調子、しぐさなどの他の非言語チャネルが送信する意味情報を総合して判断していることがわかる。

### 4. 情報の不一致について

非言語的行動は言語的行動と矛盾した情報を相手に伝えることもできる。口では「好きだ」と言いながら嫌そうな顔をしていたり、「本当だよ」と言っては相手と視線を合わせないなどの言語的行動と非言語的行動の意味情報が食い違う場合には、我々は得てして非言語的情報を信用しがちである。これは一般に、非言語的情報が言語的情報より送り手の統制を受けずに無意識的に発信されていると考えられているからである。そして非言語的情報間に矛盾が生じた場合には、より信頼のおける非言語チャネルから発信された情報に重きをおいて理解する傾向

があるとされている。このことは Mehrabian<sup>2)</sup>の感情の等式からも推察することができる。

また、情報の不一致によって表現されるメッセージには多くの情報が含まれており、直接的に表現されるものにはないニュアンスを含んでいる。状況によっては、言語的情報と非言語的情報との不一致メッセージの方がより効果的に無駄なく意図した事柄を相手に伝えられるのである。

この意味の矛盾するメッセージについて、工藤・下村<sup>7)</sup>は被験者に指定した対人場面を想像させ、選定した74項目についての回答を収集・分析した結果、①対人場面において相手からのメッセージを解釈するとき、受け手は言語的情報よりも非言語的情報を重要視すること、②言語的情報と非言語的情報が矛盾するとき、矛盾の度合いが大きくなるほど言語行動の効果が希薄になること、③姿勢・動作の非言語チャンネルにおいては矛盾の大きいメッセージほど全体的に否定的に解釈されること、そして④非言語チャンネルの相対的な効果は言語的行動と非言語的行動との間の食い違いの有無によって異なることを発見した。このように、メッセージの不一致によって得られる情報は言語的行動よりも非言語的行動により重点を置いたものであり、各非言語チャンネルによってその効果の割合が異なることがわかる。

## 5. 目的と仮説

本研究では、頷きと姿勢の異なる2つの非言語チャンネルから対をなす意味をもつと思われる非言語的行動モデルをそれぞれ作成し組み合わせ使用することによって、相手に伝わるメッセージを調査することを目的とした。そのため擬似会話場面を作成し、その結果を検討する。

主に鈴木ら<sup>6)</sup>の研究を参考に、肯定的な姿勢に『注意』、否定的な姿勢に『拒否』と名称をつけ設定し、そして頷きの量を『多量』と『少量』とした。これらをそれぞれ組み合わせ、①『注意』-『多量』、②『拒否』-『多量』、③『注意』-『少量』、④『拒否』-『少量』の4条件を設定した。本実験では、傾聴の姿勢をとり相手の発言に対し逐一反応を呈する①の条件において相手の会話量が最も増加すること、そして姿勢と頷きの不一致メッセージ(②・③)の比較において、被験者は実験者の変化しない肯定的な姿勢の情報よりも頻繁な頷きにより多くの承認を得るため、②が多くの会話量を得ると仮定した。

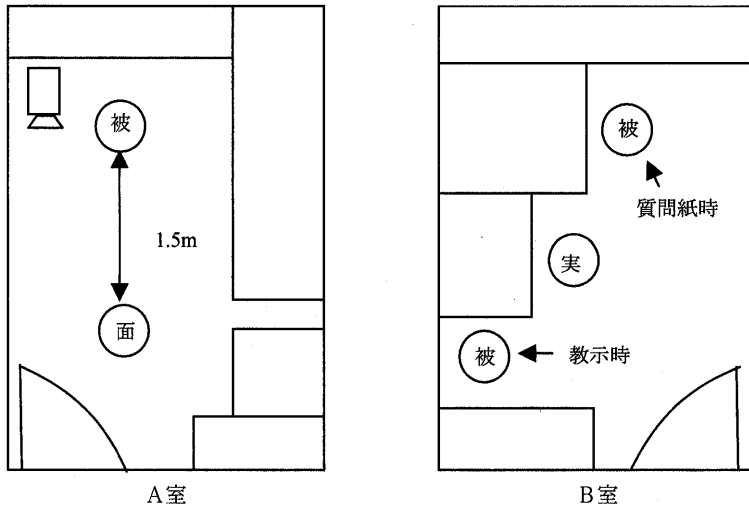
また、それらの条件が印象形成や不安・親和などの諸感情に及ぼす影響も併せて調査する。印象形成についても、会話量と同様に①が最も好ましい印象を、②と③との比較では②がより好ましい印象をそれぞれ獲得すると仮定した。

また、姿勢・動作の非言語チャンネルにおいては、矛盾の大きいメッセージほど全体的に否定的に解釈されることが工藤・下村<sup>7)</sup>によって明らかにされた。これを受けて、②と③ではどちらの条件がより矛盾の大きいメッセージとして相手に受け取られるかも調査する。相手からの否定的なメッセージを受け取った場合、その相手への好ましい印象は減少すると思われる。

## II. 方法

### 1. 実験場所

本実験はA室及びB室を Fig. 1 の通り設定し、実験を行った。なお、A室において会話実験が、B室において質問紙への記入がそれぞれ行われた。A室における面接者と被験者との対人距離は1.5mとした。



実：実験者 面：面接者 被：被験者

Fig. 1 : 実験室の詳細と対人位置

### 2. 被験者

被験者は女子大学生30名（平均年齢19.97歳）とした。女性のみとしたのは、非言語的情報への感受性や意味内容の捉え方には性差が存在するためである。また、印象形成のより明確な変化をみるために、被験者を面接者と初対面の者に限定した。

### 3. 面接者と実験者

実験者は、被験者の募集や会話場面設定、質問紙の配布・回収そして被験者の内省報告書の記入代行を行った。そして本実験の面接者として22歳の女性1名が採用され、全実験を通して面接にあたった。面接者は、眉毛が太く目が大きい中肉中背の人物であり、紺のTシャツとジーンズを着用し、頭髪を後ろで束ね化粧を施さない容姿であった。本実験で設定した条件以外の効果を統制するために、実験者は面接者に全実験を通して視線を被験者の顎のあたりで固定し微笑の表情をとるように依頼し、訓練を行った。また、全ての実験が終了するまで面接者には本実験の意図を伏せた。

#### 4. 会話題目の選定

本実験は初対面の人物同士における会話実験であり、スムーズに会話が行われない可能性が懸念された。そこで実験者は会話の足懸りとして会話題目を設定し、与えられた題目について被験者が面接者に話をすることによって、被験者の負担を低減させ自己開示を促すことができると考え、事前調査を行い会話題目を選定した。大学生50名を対象にアンケートを配布し、初対面の人物にも話しやすいと思われる題目と初対面の人物には話しにくいと思われる題目のそれぞれについて2つずつ回答するよう求めた。その回答を加減法で集計した結果が Tab. 1 である。会話題目として1)『好きな TV 番組』, 2)『自分の田舎自慢』, 3)『今まで経験した旅行』の3つの会話題目が採用されたが、2)の題目についてさらに抵抗なく理解できるように、趣旨はそのままに言葉のみを変更し『自分の地元』とした。また、この調査から、初対面の人物には回答者自身の内面を語るような題目は避けられる傾向がみられた。

Tab. 1 : 会話題目アンケート集計結果

会話題目	話しやすい	話しにくい
好きな TV 番組	25	6
高校の授業と比較した大学の講義	7	19
今までに経験した旅行	19	10
自分の田舎自慢	22	11
最近の失敗談	13	24
自分の趣味	11	25

#### 5. 実験計画

本実験では主に鈴木ら<sup>6)</sup>の研究を参考に、前傾で手足を揃えた肯定的な姿勢に『注意』、やや左斜めを向き右足を組み腕を組みつつ顔を正面に向けた否定的な姿勢に『拒否』と名称をつけ設定した。そして頷きの量を、相手の発言に対して逐一頷く『多量』と、内容の如何に拘らず10秒に1回頷く『少量』とした。これらをそれぞれ組み合わせ、①『注意』-『多量』, ②『拒否』-『多量』, ③『注意』-『少量』, ④『拒否』-『少量』と、姿勢や頷きの変化しない⑤『統制』の5条件を設定し、①~④の関係を Tab. 2 に示した。また、各条件に対応した姿勢を Fig. 2 に示した。本実験は、姿勢と頷きの組合せを独立変数とし、会話量や印象形成、諸感情の変化量をそれぞれ従属変数とした、1要因被験者間計画であった。

また、会話題目による話しやすさの個人差を統制するために、3つの会話題目のうち2つを選定・順序化しそれぞれの被験者に無作為に割り当てた。そして各条件についても無作為に割り当てた。

Tab. 2 条件の構成

		頷き	
		多量	少量
姿 勢	注意	条件 1 (①)	条件 3 (③)
	拒否	条件 2 (②)	条件 4 (④)

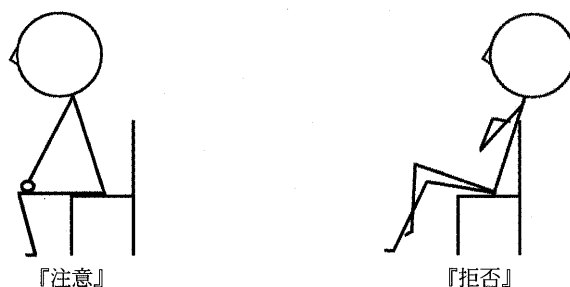


Fig. 2 : 面接者が行う『注意』と『拒否』の姿勢

## 6. 実験装置及び器具

本実験では SONY 製ビデオカメラ（ハンディカム）が使用された。ビデオカメラを被験者の右側後方に設置し、そのレンズを面接者に向け会話場面を録画した。カメラレンズを面接者に向け会話場面を録画し、実験者は事前に「カメラがありますが、これはあなたを写すものではなく、話相手を写すものですから安心してください」と被験者に伝えた。その他には着席用のパイプイス 2 脚と、試行毎の制限時間を計測するためのタイマーを 1 つ、筆記用のボールペン 1 つ、そして各種質問紙が使用された。

## 7. 質問紙

本実験中の面接者に対する印象や感情状態の変化を調査するため、質問紙が用いられた。ひとつは井上ら<sup>8)</sup>を参考に自作した印象調査用紙であり、もうひとつは寺崎ら<sup>9)</sup>による多面的感情状態尺度・短縮版であった。また、会話題目における話しやすさに偏りがなく、そして各条件においてどのような感覚を受けたかを調査するために内省報告書を作成し使用した。

本実験で作成した印象調査用紙は、井上ら<sup>8)</sup>が様々な形容詞対を収集し自己概念や色彩など多岐にわたる刺激概念における因子負荷量を調査したもののから、他の人格を対象とする印象形成概念についての有効な形容詞対 13 項目を選定し、4 件の SD 法で形成された。この質問紙は好意的な印象の程度を計測したものであり、得点が高いほどその相手に対し好印象を抱くものであった。

また、多面的感情状態尺度・短縮版は感情を表す単語 40 項目について 4 件法で回答する質問紙であり、抑うつ・不安、倦怠、非活動的快、集中、敵意、活動的快、親和、そして驚愕の 8 つの下位尺度から形成された。

## 8. 手続き

実験者はまず、被験者を B 室へ案内した。実験者は被験者に座席を勧め、その左隣に立ち指示を行い被験者の理解が得られてから A 室に待機している面接者を被験者と引き合わせた。そ

の際に、面接者のほうから挨拶と氏名のみを自己紹介をさせた。そして被験者から何も反応がなかった場合にのみ、面接者は被験者の自己紹介を促した。このとき面接者は楽な立ち姿勢で自然な対応をした。そして面接者は自己紹介の際に年齢や学年を被験者に教えないことによって、社会的ステータスによる影響を統制した。面接者を退室させたのち、実験者は面接者の第一印象を印象調査用紙に、そして今現在の感情状態を多面的感情状態尺度・短縮版に記入することを被験者に求めた。記入終了後に、実験者は被験者をA室に案内した。その際に面接者はビデオカメラの録画スイッチを入れてからドアを開け被験者を迎え入れた。面接者は被験者に指定の席を勧め、被験者と面接者自身が着席したのを確認してから、実験の説明を行い1試行につき3分間を手を持ったタイマーで計測し、あらかじめ被験者に割り当てられた題目を順次提示した。

本実験では被験者が面接者に対して発言する方式が採用された。最初の説明と会話題目の提示以外での面接者の発言は統制され、被験者が話す事柄に頷き「はい」と相槌をうつのみとした。面接者の頷きに相槌を伴わせたのは、本実験で設定した頷きをより現実のそれに近づけさせるためであった。また、本実験を現実場面により近づけるために、例外として被験者が話に詰まりきった場合に一度だけ面接者は「他に何かありませんか?」と発言することができた。試行1では、面接者は全ての条件において自然な頷きとリラックスした姿勢をとった。そして1試行目を終了し試行2を開始する前に、面接者は試行2に用いる会話題目を提示しつつ各条件に対応する姿勢をとり頷きの回数を変化させた。会話実験終了後に面接者は退室し、その後実験者が被験者をA室からB室に誘導した。そして会話実験前に記入を求めた2種類の質問紙について、実験者は被験者に会話面接を終えての面接者の印象と現時点の感情状態の記入を求めた。実験者は、被験者の記入終了後に内省報告書の代行記入を行った。なお、本実験のタイムテーブルを Fig. 3 に示した。

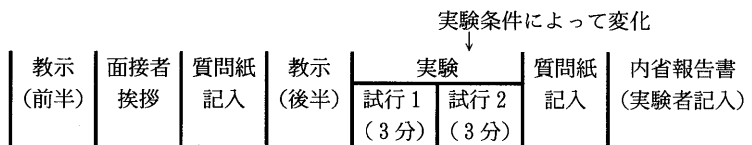


Fig. 3 : 本実験におけるタイムテーブル

## 9. 結果の処理法

会話実験を収録したビデオテープを元に各被験者の逐語録を作成し、それを文節毎に区切り数量化した。そして自問詞や感動詞、独白、笑声、呼掛詞などを特殊成分として除外し、意味文節のみを集計し会話量とした。

本実験で収集された印象調査用紙と多面的感情状態尺度・短縮版のSD評定値(共に1~4点)を条件毎に集計した。そして各条件における会話量や印象形成や諸感情の要因ごとの実験



開始前と実験終了後のSD得点を、対応のある  $t$  検定を用いて比較検討した。

また、本実験で設定した以外の要因を統制し群間の効果の差異を検討するために、試行1と試行2及び会話実験開始前と会話実験終了後のそれぞれについて条件による変化量を求め、そのデータを元に検討を行った。実験開始前と実験終了後のSD得点の変化量を条件間で対応のない1要因5水準の分散分析を用いて比較し、有意差がある場合は多重比較を行った。多面的感情状態尺度・短縮版では下位尺度ごとにこれらの処理を行った。

### III. 結果

各条件における会話量や印象形成、諸感情の平均点の推移を示したものが Tab. 3 及び Tab. 4 である。この表には、各要因について被験者の平均得点の実験条件別に記載されている。Tab. 3 や Tab. 4 からわかるように、条件を提示していない試行1や会話実験前の各要因において各群に得点の均等性が認められなかった。そこで本実験では、主に群内で各要因における試行1－試行2や会話実験開始前－終了後の得点の差異を変化量として検討した。

#### 1. 会話量についての各群の比較検討

各群における会話量の変化量は全て増加する傾向にあったが、条件5では比較的变化しなかった。特に条件1と条件3の変化量はほぼ同一で、しかも条件群間で最も増加していた。しかし、試行1と試行2間の会話量について条件毎に対応のある  $t$  検定を行ったところ、有意な差はみられなかった。また、会話変化量について1要因5水準の分散分析を行ったが、有意な差は認められなかった。

Tab. 3 : 各条件における会話量の平均値と標準偏差

	条件1		条件2		条件3		条件4		条件5	
	試行1	試行2	試行1	試行2	試行1	試行2	試行1	試行2	試行1	試行2
会話量	109.50 (61.99)	132.30 (55.86)	93.17 (32.93)	112.80 (56.06)	99.17 (26.96)	122.20 (26.51)	126.20 (47.40)	141.50 (38.33)	128.70 (35.48)	133.20 (27.81)

( ) は標準偏差

#### 2. 印象形成についての各群の比較検討

印象形成における各条件群の得点は会話実験前と会話実験終了後で変化していたが、大きな変動はみられなかった。会話実験開始前に比べて会話実験終了後には条件1が最も好印象を獲得したが、条件2と条件3ではSD得点が同程度減少し、好ましが失われていた。そこで、会話実験開始前と会話実験終了後の印象値について条件群毎に対応のある  $t$  検定を行ったが、有意な差はみられなかった。また、印象変化量について対応のない1要因5水準の分散分析を行ったが、有意な差はみられなかった。

Tab.4：各条件における印象形成及び諸感情の平均値と標準偏差

	条件1		条件2		条件3		条件4		条件5	
	実験前	実験後	実験前	実験後	実験前	実験後	実験前	実験後	実験前	実験後
印象形成	38.50 (5.09)	40.00 (6.45)	39.50 (3.39)	38.17 (6.62)	44.00 (5.93)	42.67 (3.83)	39.50 (4.81)	40.33 (7.20)	39.83 (1.17)	40.17 (7.68)
抑うつ不安	13.50 (3.02)	8.50*** (2.59)	13.67 (.82)	11.17 (3.97)	11.16 (4.62)	9.67 (3.72)	11.83 (3.19)	9.50 (4.04)	10.33 (3.14)	11.33 (2.94)
敵意	7.00 (2.53)	6.00* (1.67)	8.33 (3.56)	7.33 (2.58)	5.50 (0.84)	5.50 (1.22)	6.17 (0.98)	5.67 (1.63)	6.33 (1.86)	7.67 (3.08)
倦怠	11.83 (2.29)	10.33 (3.27)	10.83 (3.82)	10.50 (4.32)	8.50 (3.45)	9.83 (3.54)	10.17 (3.06)	8.50* (2.26)	7.17 (1.94)	10.50* (1.87)
集中	13.00 (1.67)	10.83** (2.04)	11.83 (2.14)	10.67 (3.33)	14.83 (2.86)	15.17 (3.06)	14.50 (1.52)	12.17 (3.87)	13.50 (2.66)	12.50 (2.59)
非活動的快	12.67 (1.97)	10.50 (3.56)	10.67 (3.20)	10.00 (4.00)	14.83 (3.76)	14.33 (3.14)	10.00 (3.41)	10.33 (3.72)	12.83 (2.64)	11.00 (3.03)
活動的快	10.67 (3.08)	12.33 (3.67)	9.33 (1.97)	9.33 (3.33)	10.00 (4.10)	10.17 (2.32)	8.83 (2.14)	10.00 (1.79)	12.83 (3.54)	13.00 (2.90)
親和	9.50 (2.74)	7.83 (3.67)	9.17 (2.64)	7.83** (2.79)	11.17 (3.54)	10.67 (3.83)	8.50 (2.51)	6.83 (2.32)	10.83 (3.66)	10.00 (1.67)
驚愕	13.67 (1.75)	11.67 (4.89)	10.67 (3.08)	11.50 (4.59)	10.33 (5.13)	10.17 (4.62)	10.83 (3.31)	11.17 (5.34)	11.33 (3.14)	14.83 (2.99)

( ) は標準偏差

\*\*\* :  $p < .005$  \*\* :  $p < .05$  \* :  $p < .10$

### 3. 各条件における諸感情の変化

『抑うつ・不安』の得点は、会話実験終了後に条件5を除く全群で減少しており、特に条件1では顕著な減少が認められた ( $t_{(5)}=5.18, p < .005$ )。

『敵意』の得点は、会話実験終了後に条件5を除く全群で減少していた。そして会話実験開始前と会話実験終了後の得点間で対応のある  $t$  検定を行った結果、条件1において有意な傾向がみられた ( $t_{(5)}=2.24, p < .10$ )。

『倦怠』の得点は、会話実験終了後に条件1と条件4で減少しており、条件5で増加する傾向があった。そして条件4と条件5の群のそれぞれに関し、会話実験開始前と会話実験終了後の得点間で対応のある  $t$  検定を行った結果、共に有意な傾向がみられた ( $t_{(5)}=2.19, p < .10, t_{(5)}=-2.41, p < .10$ )。また、倦怠変化量について対応のない1要因5水準の分散分析を行った結果、有意差が認められた ( $F_{(4,25)}=2.99, p < .05$ )。そこで、TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、条件1と条件5、そして条件4と条件5との間に10%水準で有意傾向が認められた。

『集中』の得点は、会話実験終了後に条件3を除く全条件で減少していた。特に条件1で有意な減少がみられた ( $t_{(5)}=3.08, p < .05$ )。

『非活動的快』の得点は、会話実験終了後に条件1と条件5で減少しているが、条件3と条件4では変化しなかった。そして、得点に変化した条件群に対し対応のある  $t$  検定を行ったが有意な差はみられなかった。

『活動的快』の得点は、会話実験終了後に条件1と条件4で増加し、条件2と条件3、条件5で変化しなかった。

『親和』の得点は、会話実験終了後に全条件で減少していた。会話実験開始前と会話実験終了後の得点間で $t$ 検定を行った結果、特に条件2において有意な減少が認められた( $t_{(5)} = 3.16, p < .05$ )。

会話実験終了後の『驚愕』の得点は、会話実験開始前に比べて条件5で有意に増加した( $t_{(5)} = -3.66, p < .05$ )。

#### IV. 考察

##### 1. 姿勢と頷きにおける会話量と印象値の変化

まず、自己開示の指標のひとつである会話量から考察する。Tab. 3から、被験者の平均会話量は条件1～4において試行2で増加したことがわかる。そして試行1と比べて試行2で条件1と条件3の間に同程度の増加がみられたことから、会話量において面接者の注意の姿勢は頷きの量に関係なく相手に影響を及ぼす傾向があると考えられる。このことによって、条件1が最も被験者からの会話量が得られるという本実験の仮説は半ば支持された。しかし、共に拒否の姿勢をとる条件2と条件4のそれぞれで、平均会話量の変化量に差がみられることから、会話量は頷きの量によっても影響を受けることがわかる。非言語的の不一致メッセージの組み合わせである条件2と条件3の会話変化量について統計的に有意な差はみられなかったが、両条件群の平均会話量の変化量には差がみられた。これにより、非言語的の不一致メッセージにおいて注意の姿勢よりも頻繁な頷きによってより多くの会話量を得るために、条件2において会話量はより増加するという本実験の仮説は支持されなかった。このことについて被験者の内省報告からは、条件2について拒否の姿勢に対し「偉そう」または「萎縮した」などの感想が提出されており、また多量の頷きについても「急かされた」などの負の感想が提出された。しかし、条件1の内省報告をみると、「頷きが多いほうが話しやすい」という感想が多かったことから、拒否の姿勢と頻繁な頷きの組み合わせでは、拒否の姿勢の方が相手により多大な影響を及ぼし、それに付随する形で頷きがその意味を変化させる傾向があることがわかる。この傾向によって、条件2における多量の頷きは拒否の姿勢に影響され、社会的承認欲求を充足させる強化因子としての役割が減少したと思われる。あるいは、頷きのもつ肯定的な意味が変化し、急かし適当に聞き流すといった意味で被験者に伝達されたとも考えられる。また、条件3の内省報告書の結果から、より前傾姿勢に影響を受けて会話したものの、被験者は頷きが試行1に比べて少なくなったことにより話しにくさを感じたことが推察される。しかし、同じ条件3において「頷きが少なくなって安心した」という感想も存在することから、同時に発信されたさまざまな非言語的情報から1つの非言語的情報の意味をとりあげて一義的に定義することは困難であることが確認できる。そして頷きという単純な行動は姿勢より更に複雑な意味の捉え方をされてい

ることが確認でき、このことは鈴木ら<sup>6)</sup>の研究と一致している。また、統制群である条件5と他の条件群の平均会話量の変化を比較すると、条件5ではほぼ変化せず、他の条件群全てで増加する傾向がみられた。このことから、どのような実験条件であれ、姿勢や頷きなどの身体状態を途中で変化させることによって、多少ではあるが会話を促す効果が生じると考えられる。

次に印象形成の要因について考察する。Tab. 4から、平均好印象得点の変化量について全条件で変化がみられた。しかし、統制群である条件5の平均得点にはほぼ変化がみられず、そして条件5に比べ、他の条件群の平均得点の変化量がそれぞれ増加し、また減少していた。そして、各条件群の平均好印象得点の変化量については有意な差はみられなかった。また、姿勢と頷きの非言語的不一致メッセージにおいて条件2と条件3の平均好印象得点は会話実験開始前と比べてそれぞれ同程度に減少している。このことから、平均好印象得点が多少増加している条件4も含め、姿勢と頷きの非言語チャンネルのもつ意味が一致している組み合わせ（条件1、条件4）は例え否定的な意味を持ち合わせていようと相手により印象を与え、姿勢と頷きの非言語チャンネルのもつ意味が一致していない組み合わせ（条件2、条件3）はその情報の受け手にメッセージの食い違いによる否定的感情を喚起させてしまい、結果として会話実験終了後の好印象得点が減少したと考えられる。これは工藤・下村<sup>7)</sup>の研究を支持する結果であるといえる。また、好印象得点が同程度に減少していることから、これらの非言語チャンネルの組み合わせによって生じる不一致メッセージは、その受け手に同程度の否定的感情を抱かせると思われる。

## 2. 姿勢と頷きによる諸感情の変化について

否定的感情である『抑うつ・不安』・『倦怠』・『敵意』、肯定的感情である『非活動的快』・『活動的快』・『親和』、そして中立感情である『集中』と『驚愕』の8種類について、設定した5条件の会話実験によって、実験開始前と終了後にどのような変化がみられるかを調査した。

Tab. 4を参照すると、まず『抑うつ・不安』の要因において条件5のみ会話実験終了後の平均得点が増加し、その他の条件群において平均得点が増加していることがわかる。これは会話実験中に面接者が設定した条件に従って態度の変化をみせるため、被験者が実験の意図をある程度察知してしまい、被験者は実験に対し半ば納得した形で会話実験を終了しそれによって実験に対する心的不安が軽減された結果であると考えられる。そして、統制群である条件5では面接者の態度が試行1と試行2で変化しないため、被験者は会話実験の意図が推測できず否定的な感情が増加したと思われる。これは実験終了後に条件5に対応する全ての被験者が実験者に本実験の意図を質問し、その他の条件に対応する被験者からは本実験の意図に対する疑問が比較的表出されなかったことから説明することができるだろう。また、条件1において抑うつ・不安得点の平均値が会話実験終了後に有意に減少したことから、肯定的な非言語的一致メッセージはその相手に対して否定的な感情を緩和する機能が備わっていると思われる。

そしてこのことは、同じ否定的感情である『敵意』にも言及することができる。

否定的感情である『倦怠』では、会話実験終了後に条件1と条件4の平均得点の減少がみられた。条件1と条件4は共に姿勢と頷きの示す意味が一致するとした条件であり、非言語的一致メッセージには受け手の倦怠感を減少させる機能があると考えられる。また、5条件の会話実験開始前と終了後の平均倦怠得点の変化量を分散分析と多重比較で検討した結果、条件1と条件5、条件4と条件5の間に有意な差がみられ、全条件中で条件5が最も倦怠に影響を及ぼしていることが判明した。なお、条件5における平均倦怠得点の増加は、『抑うつ・不安』と同様に会話実験中に面接者の態度に変化が見当たらず、被験者が会話実験に倦怠を感じたものと思われる。

条件1において、会話場面終了後に『集中』の感情が有意に減少した。有意差はみられないが条件1以外の殆どの条件群において会話実験終了後に平均集中得点が減少していることから、被験者は初対面の相手との会話によって集中力を消費し、会話実験が終了してすぐに集中力がなくなった状態になったと考えられる。そしてこの結果と内省報告から、被験者は面接者が発する条件1の肯定的で非言語的一致メッセージによって半ば無意識的に面接者からの期待を感じとり、より多くの事を話さなくてはならないと考え、他の条件群の被験者よりも高度に集中して会話したと思われる。その結果、集中力を多大に消費し、会話実験終了後にその反動で集中の感情がより減少したものと推察できる。

『非活動的快』では、会話実験終了後に条件1と条件5で平均得点が減少したが、条件3と条件4の平均得点は会話実験開始前と開始後で変化しなかった。条件3と条件4に共通するのは、設定した条件の頷きが少量であることである。このことと統制群である条件5の非活動的快の平均得点が低下していることをふまえ、本実験が「おっとりした」や「のんびりした」などの要素を含む非活動的快の低下する実験であるとするならば、少量の頷きは相手の非活動的快の感情を維持する機能を備えていると考えられるだろう。

また、同じ肯定的感情である『活動的快』では、条件1と条件4において会話実験終了後に平均得点が増加し、この条件以外の条件においては平均得点が会話実験開始前と比べて大きな変化はみられなかった。条件5を通常の状態として考えると、活動的快の感情は意味の一致した非言語メッセージにのみ反応し活性化すると考えることができる。

もうひとつの肯定的感情である『親和』の得点は、会話実験終了後で全条件において減少していた。この結果は設定条件の効果よりもむしろ本実験の性質によるものであり、会話実験の形式を面接者が被験者の話を聞き頷くだけで面接者からは何も話さないものとしていることが最大の原因であると考えられる。面接者の頷きによって被験者の発言は承認され、被験者のなかで更に承認を求める欲求が増大し、被験者は面接者からの承認だけでなく会話のキャッチボールに対しても期待を抱くが、面接者はそれを裏切る形でただ頷き続けるため、被験者の平均親和得点が会話実験終了後に減少したものと思われる。このことは内省報告において、「会話の

キャッチボールがしたかった」や「相槌（頷き）以外のだったら話しやすかった」などの被験者の感想があげられていることから説明することができよう。印象形成において各条件で会話実験開始前と終了後との間に有意な差がなく、平均好印象得点の変化量についても全条件間に有意な差がみられなかったのも同様の理由からかもしれない。また、このようななかで、条件2において会話実験開始前と終了後の親和の平均得点に有意な差がみられたのは、本実験の性質に加え、会話量における非言語的の不一致メッセージでの頷きの意味変容と同様の効果が生じたためとも考えられる。

『驚愕』の平均得点は、会話実験終了後に条件5で非常に有意に増加した。このことは『抑うつ・不安』や『敵意』と同様に、会話実験が終了しても本実験の意図が読めず驚愕していることを示していると考えられる。

### 3. 今後の展望

本研究では、複数の非言語チャンネルから同時に発信された、意味の一致したメッセージと意味の一致しないメッセージがそれぞれ受け手に与える影響を10の要因について検討した。しかし、被験者の人数が少なく、個人差の要因を排除しきれなかったために、各条件で有意な差が多くは認められず、結果の大部分は各条件群の被験者得点の平均値を単純に比較するに留まった。被験者の人数を増やし個人差の要因を排除すると、本実験とはまた別の発見があるだろう。また、非言語的の不一致メッセージにはまだ本実験では検討しきれなかった多くの機能が存在すると思われる。これらのことをふまえ、非言語コミュニケーションについて更に研究を重ねる必要がある。

また、本実験は実験室研究であり、実際の場面に近づけるように工夫したが実際の場面とは異なっている。しかしまた、共通する部分も多く存在すると思われる。本実験の結果や非言語的コミュニケーションを理解・応用することによって生じる利点は、相手の気持ちをよりよく理解し人間関係を円滑にできることである。本実験では主に2つの非言語チャンネルを組み合わせた非言語的情報がいかに相手に伝達され影響を及ぼすのかを調査したが、このことは非言語チャンネルのどの水準の組み合わせを使用すれば相手に自分の感情を効果的に伝達できるかということと表裏一体の関係にある。本実験の結果を参考にしコミュニケーションを図ることにより、さらに快適な人間関係を形成することができるだろう。

そして、この非言語コミュニケーションの技術を臨床に応用することにより、言葉では自分の気持ちを表現することが困難な人の気持ちを汲み、また不安状態にある人には肯定的な態度で接するなどのよりよい配慮が行えるようになるだろう。

## 引用文献

- 1) 大坊郁夫 1998 セレクション社会心理学-14 しぐさのコミュニケーション-人は親しみをどう伝えあうか- サイエンス社.
- 2) A・マレービアン(著) 西田司・津田幸男・岡村輝人・山口常夫(訳) 1986 非言語コミュニケーション 聖文社.  
(Albert Mehrabian. 1981 Silent Messages Implicit Communication of Emotion and attitudes. Los Angeles : California.).
- 3) Mehrabian A. 1968 Relationship of Attitude to Seated Posture, Orientation, and Distance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 10, 26-30.
- 4) 工藤力・西川正之 1984 姿勢の意味次元の検討 *心理学研究*, 64, 263-270.
- 5) Matarazzo J, D., Saslow, G., Wiens, A. N., Weitman, M. & Allen, B. V. 1964 Interviewer Head Nodding and Interviewee Speech Durations. *Psychotherapy : Theory, Research and Practice*, 1, 54-63.
- 6) 鈴木晶夫・藤田宗和・下田正代 1990 ノンバーバル行動の認知-姿勢と身振りについて- 早稲田心理学年報, 22, 15-22.
- 7) 工藤力・下村陽一 1999 不一致メッセージに関する研究 大阪教育大学紀要, IV, 47, 449-469.
- 8) 井上正明・小林利宣 1985 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 *教育心理学研究*, 33, 253-260.
- 9) 寺崎正治・古賀愛人・岸本陽一 1991 多面的感情状態尺度・短縮版の作成 日本心理学会第55回大会発表論文集, 435.